

経済学と聖書(9)

2020年7月3日(金)

関西学院大学経済学部

春学期チャペル

担当：井口 泰

1. 愛する神にのみ 依り頼むものは
苦しみの時にも ふしぎに守られ、
岩を土台とし 建つ家のような。
2. この悩み苦しき、誰が知るのだろう。
この痛み嘆きを 誰がなぐさめよう。
むなしく重荷は 増えていくばかり。
3. しかし主の恵みは 私たちに満ち
安らぎを与えて 摂理をあらわす。
選ばれたものに ふさわしく生きよう。
4. 喜びの日を主は 備えてくださる。
その日を待ち望み まよいを退け、
み心を信じ み旨に従おう。
5. 苦しみの中にも 神は見はなさず、
ふところに抱いて 良いもので満たす。
進みゆく道を 神は祝される。
6. み手に導かれて すべては正され、
力を誇るもの み前におののく。
私たちの主は 正義の礎。
7. 歌と祈りささげ 主の道を歩もう。
祝福を受けつつ 新たに生かされ、
見捨てることない 神に依り頼もう。

- 1) Wer nur den lieben Gott lässt walten
und hoffet auf ihn allezeit,
den wird er wunderbar erhalten
in aller Not und Traurigkeit.
Wer Gott, dem Allerhöchsten, traut,
der hat auf keinen Sand gebaut.
- 2) Was helfen uns die schweren Sorgen,
was hilft uns unser Weh und Ach?
Was hilft es, dass wir alle Morgen
beseufzen unser Ungemach?
Wir machen unser Kreuz und Leid
nur größer durch die Traurigkeit.
- 3) Man halte nur ein wenig stille
und sei doch in sich selbst vergnügt,
wie unser's Gottes Gnadenwille,
wie sein Allwissenheit es fügt;
Gott, der uns sich hat auserwählt,
der weiß auch sehr wohl, was uns fehlt.
- 4) Er kennt die rechten Freudenstunden,
er weiß wohl, wann es nützlich sei;
wenn er uns nur hat treu erfunden
und merket keine Heuchelei,
so kommt Gott, eh wir's uns versehn,
und lässet uns viel Guts geschehn.

- 5) Denk nicht in deiner Drangsalshitze,
dass du von Gott verlassen seist
und dass ihm der im Schoße sitze,
der sich mit stetem Glücke speist.
Die Folgezeit verändert viel
und setzt jeglichem sein Ziel.
- 6) Es sind ja Gott sehr leichte Sachen
und ist dem Höchsten alles gleich:
Den Reichen klein und arm zu machen,
den Armen aber groß und reich.
Gott ist der rechte Wundermann,
der bald erhöh'n, bald stürzen kann.
- 7) Sing, bet und geh auf Gottes Wegen,
verricht das Deine nur getreu
und trau des Himmels reichem Segen,
so wird er bei dir werden neu;
denn welcher seine Zuversicht
auf Gott setzt, den verlässt er nicht.

コリントⅡ12:9 「弱いところに働く」 「…しかし、主は「私の恵みは、あなたに十分である。私の力は弱さのうちに完全に現れるからである。」と言われました。」

現代人のほとんどは、神様のことを、世界の情報を全て支配する巨大なコンピューターのような存在としてしか、イメージすることができなくなっているのではないのでしょうか。人工知能(AI)とビッグデータが結びついて、急速な学習能力を発揮しています。2045年に人間の頭脳を超えるだろうという仮説(Singularity)自体が、影響も否定できないと思います。

しかし、人類は如何なるスーパー・コンピューターをもってしても、世界の行方を正しく予測することはできません。この世で起こることは、「因果律」の法則といわれる論理的な推論だけで予想することは不可能です。将来について、あらゆることが確率的にしか予測できないのです。

サイエンスとは、もともとそのような限界を持ったものであったのです。しかし、限られた前提と単純化された数理モデルで導かれる結論で、将来が予測できると半ば信じられているように見えます。現実には、社会科学において予測不可能性は、自然科学より、さらに低い可能性があります。

それにもかかわらず、経済学は、私たちのコロナ危機からの脱出の合理的な選択を行うことを可能にしてくれるのでしょうか。感染防止のために、どこまで人の移動を制限して経済活動を低下させることが、経済的のみならず、人的及び社会的な損失を、最も抑えることにつながるのでしょうか。

コロナ危機は、経済学と医学・疫学の協力が不可欠になってきた新たな時代の到来を示しています。例えば、人の移動の停止を1か月行うだけで、日本経済の場合、40～50兆円（GDP比10%前後）の減少を覚悟しなければなりません。これを何か月も続けることによる感染症の抑制のコストは、膨大なものになります。

さらに、気を付けなければならないのは、感染が終息しても、それまでに、産業・企業や個人・家族が死滅し再起不能になってしまうなら、長期間の「ロックダウン」を続けることが無意味になることです。

感染症で重症化した人だけでなく、年老いた人々、重い障害を負った人々、治る見込みのない人々、社会のなかで差別されている人々にとっても、人生の意味は、社会的に順調に暮らすことができる人の場合と全く違ったものになります。私たちは、通常であれば、自分のことで精いっぱい、こうした人たちの弱さを感じることも、できなかつたはずです。

実に、イエス様の教えは、弱さや悲惨さに対し積極的な意味を与えたことに、革命的な意味があります。強い者こそ不完全であって、弱い者こそ完全なのかもしれません。そこに大いな逆説があります。それは、神様がこの世に介入される時とは、神様が苦しまれる時であるからです。私たちが苦しんでいるとき神様はもっと苦しんでおられる。そのことを聖書は語っています。まさに今こそ、弱さということに、もっと配慮と価値をおいた社会を考えると、きだと思われま

紀元3～4世紀におけるローマでの疫病の時代に、当時のキリスト信徒たちが、感染した人々を親身に看護したことが記録されています。こうした記録に誇張がないとは言えません。しかし、神様が弱いところに働かれるのは、私たち自身が、ほかのひとたちの弱さを担い、現在の世界を超えた新たな世界への希望を与える使命を持っていることを示していると思います。

2020年7月、世界各地でロックダウンや自粛から、経済の再開が進むなかで、感染が鎮静化した国々でも「第二波」襲来は避けられないとみられます。北米だけでなく中南米でも感染拡大で、感染者は7月1日に、世界で1000万人を超えました。

そうしたなかで、私たちも、日々心が落ち込んだり、栄養や睡眠が乏しくなって免疫が失われる事態を避けねばなりません。

また、一国が危機を脱しても、世界で危険が広がれば国外からの流入による危険は高まり、感染の終結は一層遠のきます。自国のことで精いっぱいといつまでも言っているわけにいきません。一日も早く、国際協力の枠組みを強化しなければなりません。

経済においては、感染リスクの高い人たちの医療と生活保障は優先されねばなりません。それは、雇用の正規・非正規を問わず、体調不良や病気であるときには休息して健康を回復できることが当たり前となり、その間生活が維持できる経済システムをつくることが重要です。コロナ危機への一過性の対策におおらせず、新たな世界に向けて動き出す時だと思います。